

<コメント>

「地層処分」に「社会受容性」はあるのか

2018 年環境経済・政策学会 (Seeps) 全国大会 企画セッション

高レベル放射性廃棄物 (HLW) の

最終処分をめぐる社会的受容性と可逆性

2018年9月8日 (土)

上智大学四谷キャンパス

東京電機大学 寿楽 浩太

全体へのコメント

- HLW処分の「社会受容性」問題の核心：
社会的に正当な「無限責任の有限化」（松本 2009）はいかに構想・実装可能か
- 第1報告が指摘する「順応性」や「謙虚さ」の重要性は討論者も強く共有する見解だが、他方で、異なる社会的要求もある
 - 完全かつ最終的な解決策とその根拠を求める社会的要求
 - 「順応性」や「謙虚さ」を理由にすればこそ、能動的管理の継続を望む社会的要求

第1報告へのコメント

- ある種の社会的フィクションとしてのR&R
 - 「可逆性と回収可能性を求める社会的な圧力は、具体的に回収の用意をするということを持に求めるというよりはむしろ、可逆性のない段階を避け、公衆参加型の意思決定プロセスを積極的に維持しようとする方向性を有しているのかもしれない」（OECD/NEA 2011）
- 「日本では可逆性が限定的に理解されている」のは確かにそうに見えるが、明確な検討や議論があったわけではないのにそう理解されている点こそ留意が必要
- 意思決定の「ホールドポイント」はどう設けられるべきか。時点、決め方、拘束性と柔軟性...

第2報告へのコメント

- 過去の経緯に起因する不信の連鎖に対し、政府、推進側当局はどう対処すべきなのか
 - 各地域での「拒否」継続につながるだけでなく、社会全体の不信を強化・維持する効果（cf. 瑞浪の「期限切れ」問題）
 - 成田空港円卓会議、豊島産業廃棄物違法処分問題の公害調停等に見られる、謝罪を含む調停の場が必要か？
- 「有望地」を求めてしまう人びとの心性をどう理解するか
 - このイマジナリーは、社会的地位や原子力や地層処分への賛否に関わらず広範に共有されているように思われる

第3報告へのコメント

- 社会的受容性モデルについて
 - 「NIMBY」の文脈の差異：「総論賛成各論反対」的状況（再エネ） vs 「総論・各論とも反対」的状況（原子力）
- 「全国レベルの受容性と地域社会レベルの受容性に乖離がある」のは...
 - 3つの受容性のいずれか、複数、あるいは全てにおける本質的矛盾の表出であり、抜本的な解決は困難？
 - 本来は解消可能な不備によるもので、対処可能なもの？
だとすれば、どの受容性から手をつけることが有効？
- 本当に「立地問題」に持ち込めるのか

第4報告へのコメント

- 「地層処分に関わる科学技術的・社会科学的専門的知識」の難しさの内実、その核心は何か。それはそもそも「知識」なのか
- 「セーフティーケース」の含意の矮小化についてどう考えるか
 - 英米法系の対審構造による紛争解決における“case”概念の含意
 - NUMO自身による含意の矮小化：「さまざまな科学技術的な論拠と証拠を示して、処分場の安全性が確かなものであることを説明する文書のこと」
- 「言い当てるもの」「日本は全部変動帯」という通俗的理解は確かに批判されうるが、ではしかし、理学者はどう振る舞うべきなのか
（例：地震「予知」や防災をめぐるスタンスなどとの緊張関係）

全体へのコメント

- 「地層処分の能動的管理」（第4報告）と原子力規制委の動向
 - 300～400年間の事業者による管理と規制の継続による安全確保
 - モニタリング
 - 定期安全レビュー（PSR）の実施
 - その後、無期限の政府による「制度的管理」
- 世代間倫理を強く念頭に置き、受動安全への移行を目指す「最終処分」の考え方のゆらぎと、その社会的含意（cf. Sundqvist 2018）